

## 第11分科会 保健体育 保健分散会

### 「子どもたちの成長を願う養護教諭の豊かな実践から学ぶ」

北海道旭川東高等学校 高松 葉子

#### 1 基調報告

8月30日、英BBCが「一日本の若者は目覚めた一日本の若者は政治に無関心で無気力だと批判されるが、彼らは目覚め、沈黙することを拒否しているようだ」。そして「（安倍首相が）この声を聞いているのかが問題だ」と報じた。9月19日未明、参院本会議で怒濤の中強行採決され、安保関連法は可決され、成立した。19日、デモに参加した男子高校生（17）は「抗議の流れは、安倍首相には止められない。僕らの未来をどのように（強行採決で）決められるのは腹が立つ」（毎日新聞）とコメントしていた。来夏の参院選時には18歳で投票権を得る若い力を感じる。思想、信条、世代、性別を超え、多くの人たちとともに、憲法9条を守る運動をすすめていきたい。

厚生労働省は10月8日、全国の児童相談所が2014年度に対応した児童虐待は8万8931件で、昨年から1万5129件（20.5%）増え、統計をとり始めた1990年度から24年連続で過去最多を更新したと、速報値を発表した。同時に、検証を経た13年度中に虐待で死亡したと確認された子どもは69人に上ると発表した。

昨年、厚生労働省は「子どもの（相対性）貧困率は過去最悪の16.3%に上り、6人に1人の約325万人が「貧困」に該当する」と発表した。貧困家庭の収入が低いのは親たちが働いていないからではなく、ほとんどがワーキングプアである。（日本の子育て世帯の失業率は先進国の中で最も低い）。昼夜を問わず働き、生活するだけで精一杯で、子どもと一緒に時間さえ取れない家庭では、基本的な生活習慣や学力、親子関係さえも身につけることが難しい状態にある。全国学力テストでも、低所得世帯の子供の学力が低いことが分析されているが、学力以前の健康、食生活など、生活基盤の安定がもっとも重要である。

しかし、学校でも、「学力向上」が最優先され、授業時数の確保で行事が削減され、子どもたちを競争にかりたて、学ぶことの喜びや達成感を得る余裕さえなくなっている。

家庭でも学校でも居場所がなく、安心できる場所を求めている子どもたちのSOSを受け止める存在が必要である。

私たちの仕事は、健康診断や子どもたちとの日々のかかわりの中で、子どものからだや心の実態をつかみ、子どもの訴えに耳を傾け、まるごと受け止めることから出発している。子どもたちの発する「サイン」はさまざまであるが、「数値や言葉にならない子どもの訴え」に気付き、発信することも保健室の大切な役割である。子どもたちをとりまく社会情勢や生活環境に目を向けながら、子どものからだや心の状態について大いに交流し、その背景にある問題や発達課題をとらえる目を確かなものとしていきたい。そして、保健室からの発信力を高め合い、学校づくり、保護者との共同の取り組みを進めていきたい。今分科会でも、仲間の日々の実践から、学校保健と養護教諭の仕事のあり方を学びあい、深めていくものである。（道教組養護教員部）

## 2 実践報告と討議から

### （1）「生活リズムの取り組みとメディアについて」

豊富町立豊富小学校 池田 晓

この生活調査は平成18年から前任者が始めたもので、重点項目を変えながら長く続けている。子どもたちの経年変化がわかる資料となっている。以前は町に1名いる栄養教諭の協力してもらい、朝食に重点を置いた時もあったが、この2年間はメディア時間について重点をおいている。昨年度の調査結果から1日2時間以上メディアに接している児童が40%以上いることがわかった。子どもたちの話題もネット動画やネットゲームのことが多く、家庭学習定着課題もあり、「アウトメディア」について取り組みことにした。夏休み中10日間の生活調査には、アウトメディアに挑戦する日（いつもよりメディア時間を少なくする、またはなくす）を各自で設け、その達成度をみた。結果として、生活リズム調べの10日間におけるメディア時間は平均すると20分も減少

した。それとともにメディア時間を減らしたことによる生活改善も報告され、子どもと家庭が努力した成果が現れた。保護者からもこの取り組みは好評であった。親子のコミュニケーションがされたことも大きな成果である。

何のために調査をするのか、その視点がなくてはならない。この実践では調査を通して子どもたちに規則正しい生活を、親がかりではなく自分で自分の生活を管理できることを目的としている。またアウトメディアの目標を自分で設定し自分で成し遂げる仕掛けも含まれており、より主体的に生活を振り返りながら健康生活を確立することができる。今後は、なぜアウトメディアなのか、その理由を子どもたちにさらに深めさせることを保健指導していく。これからもさらに発展させることができる実践である。

討議の中では、メディア漬けで外遊びや体を使った遊びをしない小学生のからだのおかしさが話題となった。遊びの中で全力疾走した経験がなく、体を動かすと足の故障を起こす。中学校で部活動を始めると、足がしっかりしている子は怪我をしないが、からだができていないので故障する子が多い。以前なら自然とできていたからだ作りが、これからは教育現場でしかけて作為的にやっていかなくては、子どもの身体は育めない。そして現場の養護教諭のこのような気付きは、もっと発信していくべきとの意見がでた。

## (2) 「いのちと人権について考えてみよう！」

～「年をとること」を学ぼう～

平取町立平取小学校 國保 いずみ

國保さんは今年度「いのちと人権について考える」教育を一貫してすすめている。今回の実践はこれらをより深め、深化・補完する内容になった。自らの人生をよりよいものにするため「いのち」や「生きる」を考える上で「誕生」や「死」とならんで「老い」について子どもたちに学んでもらいたいと考えた。「老い」を自分の人生の見通しの中に引き寄せ、我がこととして考えることを通して「老人」である他者に対する理解を深めさせていくことを目的とした。

内容のメインは、体験型授業の実施である。授業は地域活動指定相談支援センターと老人福祉施設の介護福祉士2名に来校してもらい、高齢者疑似体験セ

ットを実際に子どもたちに使わせて実施した。客観的世界への「科学的な知」の追求から、体験学習という子どもたちの主体的な実感を通した学びは、大きな教育効果をもたらした。子どもたちは体感したことから、お年寄りの大変さへの共感と優しいいたわりの気持ちを持つことになった。また、授業前後に保健だよりを継続発行し、授業を授業のみで終わらせず、保健だよりを通して事前事後学習をさせること、工夫した自作の掲示物を使って全校的に指導内容を発信するいつもの國保実践の展開が、今回も教育効果を高めている。

子どもたちは以下のような感想を書いた。「年をとったらバランスを取るのがむずかしい。お年寄りに優しくしようと思った。」「運動や遊びや栄養をとることが大事だということがわかりました。」「今のうちから健康に心がけて、僕は元気なおじいちゃんになりたいです。」「年寄りになって、リュウマチや体が弱くならないため、今のうちに健康に気をつけておこうと思う。」子どもたちは、今回の学びを通して、老いを自分たちにも訪れるものとして捉え、これから自分たちにできることは何であるかを考えた。肉体的大変さを抱える身近なお年寄りに対しては、自分にできることで関わりたい、そして自分が少しでも元気に年をとるために、今できることやこれからやれることをやりたいと結論づけた。保健指導を通して、自らの人生をよりよいものに築き、なおかつ社会作り（制度やコミュニティも含め）の糧にしていってもらいたいという國保さんの思いが伝わる実践である。國保さんは、人として縦にも横にも、助けたり助けられたりするのが人間であり、そんな人生を子どもたちに伝えたかったと語った。「老い・死を学ぶ」＝「生きることを学ぶ」ことである。「知る」ことは、子どもたちの人生を豊かにする。

### （3）「保健室からできること」

江差町立江差小学校 野口 真弓

野口さんは子どもたちの実態を的確に把握し、様々な実践を展開している。江差小学校では、児童数は減少しているが保健室は年々忙しくなっている。ところが外科的来室は減っている。理由は、前年度に校舎内廊下と階段に赤いビニールテープで中央線をつけ、片側歩行を全校に指導した。そのため、校内の衝突事故とそれによる怪我が減ったという。また、う歯予防のための給食後の歯みがきタイムを設定した。最初は歯ブラシさえ持て来ない子どもが多か

ったが、給食時間終了後の5分間を“歯磨きタイム”として日課表に設定することができたこと、保育委員会で行っているハンカチ・ティッシュ点検活動に歯ブラシ点検も加えたことにより、全校歯磨きを定着させた。長期休業中はキャラクターを施した歯磨きカレンダーを使って毎日の歯磨きを呼びかけている。また、健康診断では「効率よく丁寧に」を心がけ、保護者にも理解してもらえるようアプローチしている。年に2回実施している身体計測と視力検査、1・4年の色覚検査に加え、突発性側湾症になった子がいたことをきっかけに始めた内科検診時の前屈検査など、様々な工夫をしている。野口さんはいつも保護者と子どもの立場に立ったスタンスで実践をすすめる。そして一人ではなく、職場の同僚も巻き込んで取り組んでいるところも学ぶべきところである。仲間作りは職場づくりであり、学校づくりであることを、野口さんの実践は語っている。

#### （4）「保健室で関わる子ども達～ランドセルは保健室～」〈学校名非公開〉

小学校での保健室登校児童たちとの出会いを綴ったレポートである。様々な家庭環境の中で生活しながら登校する子どもたちの様子が報告された。不登校はどこの学校にもある。そして原因を探ると防げた事例もあったように思う。母子家庭の場合、子どもだけでなく母親にとっても学校の先生は怖い（とりわけ男性教諭）と感じてしまう場面もある。そんな母子に養護教諭として関わった事例も報告された。子どもと担任、親と担任、3者の関係作りの難しさと重要性を改めて感じた。標題の「～ランドセルは保健室～」の事例では、登校しうりから保健室登校になった児童がピンクのランドセルを保健室の箱にしまい一日を過ごしていた。教室に行けるようになっても、養護教諭がふと気付くとランドセルは保健室の箱の中にしまわれていた。この子は登校して教室に行く前に保健室に寄り、始業チャイムが鳴る前に教科書ノートを持って教室に通っているのである。子どもが保健室を心の拠り所として教室に向かっているのがよくわかる事例であった。レポーターは、子どもが『保健室が落ち着く場所』と言うならウエルカムでいいだけいってみよう、養護教諭としてできることをやるまでだと語った。校内では生徒指導会議、不登校対策会議やサポートチーム会議などで対応している。レポーターの力量に学校全体が支えられていると感じた。

## (5) 「今、子どもの体と心が危ない～科学物質から命を守るために～」

家庭栄養研究会会員・たべもの通信“ぽてとクラブ”会長 川村 佳以知

1980年代後半から言われている子どもの身体と心のおかしさ（1位：アレルギー 2位：授業中じっとしていない 3位：疲れやすい）や軽度発達障害の増加の原因は、化学物質が原因だと考える。現在、子どもの脳への影響が報告されている12の原因物質や環境ホルモンについて報告があった。ゲームやスマホの影響なども合わせて報告された。また、牛乳には牛の女性ホルモンが含まれており、多量に摂取すると乳がんの素地をつくる恐れがあるとの報告もあった。現代の私たちにできることを考えてみると、妊娠前と妊娠中の女性には特に配慮すること（社会的対策も必要）、食生活ではできるかぎり化学物質を摂取しないように安全な食材を使用し工夫すること、また、合成製品の使用を減らすこと、地域や自治体では農薬や殺虫剤散布を見合わせること。国の政策として、疑わしい製品は原則使用禁止し安全が確認されてものだけ使用するべきとのことであった。討議の中で、自分たちにできることをしていくことの大切さ、またこれらの知識を持って生活していくことが重要であると確認した。

## 3 まとめと課題

今年は、レポートが5本と例年より少なかったが、参加人数17名で討議の時間を充分にとりながら学びを深めることができた。それぞれのレポートからは、各地域の子どもたちの実態が報告され、それぞれの現場で奮闘している仲間の姿から元気をもらった。問題を抱える子どもたちは、家庭とその社会の影響を真正面から受けている。よりよく生きたいと考える以前に、家庭や地域から必要な手立てを受けていないという感が否めない。そんな中、子どもたちの問題は以前にも増して複雑になっている。

まず、メディアの問題については、スマートフォンの普及により、多くの子どもたちが一日の多くの時間をインターネットによる動画・SNS・ゲームなどに費やしている現状がある。ふと気付けば、TVでもネットゲームのCMが多くなっている。大人が作った環境に一番悪影響を受けているのは、子どもたちであることを、この問題でも実感する。教育の現場で、さらに指導をして

いく必要がある。私たちは子どもをとりまく世の中の環境すべてを変えることはできなくても、個々に向き合った子どもの経験を変えることができる。子どもの経験を変えることは、子どもと関わっている現場の教師にしかできない。特にSNS利用については、身体の健康だけでなく人間関係やいじめの問題も含んでおり、今後も取り組むべき課題の一つである。

健康診断については、2016年度より学校保健安全法の改正により、検査項目の一部変更がある。子どもの健康実態によって健康診断はその時々で変わって然るべきと考えるが、文科省からの一方的な変更であってはならない。今回の改正点については、今後の各学校での実施状況とその評価を待ちたい。今回のレポートから学んだような子どもたちの健康実態に基づき、現場教師と保護者の願いのもとにある健康診断こそが、真に私達がなすべき健康診断であるということをここで確認したい。

日本の貧困率は急上昇しており、特に子どもの貧困は深刻である。一日のうち栄養バランスのとれた食事は学校給食だけという子も少なくない。経済的・時間的に満たされ、家族そろって食卓を囲める社会の実現が望まれる。これにあわせて食の安全についても考えていかなくてはならない。TPP合意をうけ、この問題については今後さらに注意深くみていかなくてはいけない。子どもたちに安心できる日本の食生活を残し、食をとりまく社会的環境が変化していくなかで、保健指導を通して子どもたちに必要な知識を伝えていかなくてはならない。

今年の実践報告レポートは小学校のみとなった。参加者の皆さんには、レポートなしで気軽に参加していただき討議の中から学んでいただけでも、この教研集会の意義はあると思う。討議の中で、保健室からの情報発信というテーマが上がった。教研集会で報告された子どもの実態は、さらに発信していく必要があると同時に、参加者が各学校の保健室にもどって子どもを見る視点を確立するのに役立つものとなっている。

子どもたちの成長を願い子どもの問題を解決していくこうとする養護教諭の仕事は、いずれも養護教諭実践としてこの場で報告できるものと考える。成果を上げたレポートでなくても、困っていることや成果がみえない事例こそ、この場に持ち寄り学び合いたい。子どもの成長のしかたは、ひとりひとり違う。

画一的で管理的な教育活動ではなく、子どもの個々の実態に合わせた豊かな実践の報告が、次年度もたくさんあることを期待するものである。